第六号

頭陀物語

全

宣教寺藏

寶文庫

門鑰

むかし武山の前に[illegible]
[illegible]
蕉翁の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

少郎は新語を補ふは滑稽の世説
少も以てむと書くふところは書へと
東武は深川の門を里も用かしまゝ
帝の皇居の夏出をしふはおはし意
にかゝる事はあまりを探り出し前話
は二の門ゟ新は破里而歌のまゝし火
去かゝる所にて机の空へに一書とゝかゝぬ
かくして蕉門路陀地かたりと題しこの

事實の子にかへしあらはれと

寛延辛未九月

武埠吸露庵

芭蕉翁所陀物のうち目録

△ [illegible]翁北枝のもとに屋ある并秋風乃句詠

△ 翁行脚物のうち并藤乃吟

△ おこさ[illegible]古人乃句評并いたはまの句

△ 翁去来ら文通の答

△ 翁近江行脚并路通入門

△ おこさ[illegible]小町乃附句

△ 其角[illegible]坡に句を[illegible]

△ 義仲寺乃法莚并其角使客に威を振

△ 其角三井ちに[illegible]二章

△ 支考[illegible]俗

△ 支考 福寿草乃花に親ス
△ 支考 紀元ヘ文通 并 乙由乃句評
△ 支考 八夕くれ乃集を撰 并 第三乃句 東
△ 支考 童平をさしたさんて芳野山にゆる
△ 支考 乙由の附句を奪フ
△ 惟然 村俳狂 并 許六て狗集を説ス
△ 惟然 坊むをめる遇ふ 并 志くれ乃句
△ 奈良乃梅月おもとの家
△ 丈草 去来 支考 野水 越人 石山に會ス
△ 杉風 翁の喪を清とむ 并 支考と絶交
△ 鳥雪 以下四輩を評ス

△ 野坡流り
△ 野坡 終人にあふ 并 發句
△ 野坡 不表乃吟をしる
△ 李由 笠塚をこさつく
△ 許六 病を病 并 万子にまみゆ
△ 万子 翁にまみゆ 翁北枝に留す
△ 洒堂 梅の落の集をあつかる
△ 思貫 貧にせ病る 并 路通の事
△ 涼兎 化物に遇
△ 涼兎 發世
△ 青杖 椿乃花に書し月花の姿情をさとる

△ 素林ちゝ考オをたゞの為

蕉門頭陀物のたり　涼袋述

△ おきれ北枝のことにやらせ并秋風の句談

ちゝを乃尊載路をとゝ歴て秋の半金沢に入小枝ゆきとに
橋寝して春もの此をおのゝ里にあるゝ此句をなるゝと
あのくと日は淋れなくも秋の山
北枝難しけるやしまことに此句意は今一二里の道をのへ
秋乃風をうけはおしむべく日は又はやくかゝ雨のんとも海に霧拭くる
神よ夕附日遠山松もくれなゐなるはゆきゆき暮乃夕日と
いたまさ秋と山とらふ字をいはるゝて宮を乃廣かしてそとに
雑問味アリ　尚うまつきのてされなう秋と金沢に北枝ありと名にたるよ
主人也系秋乃風と東しらせさまやこれ秋の風を見ましむ

夕の情を盡しあのくと日ハ傾れすくも入果し風ぶいと
肌にあたる変に格人乃姿なのんやこしきしきしより風に
いたく聞ゆる人なのんのと志ひくく山と訪し是北枝子を
志しきるに景や三神ゆるし於て風を出て其所なる所
金乃交に及ぬ

△翁行脚物のたる事并藤乃句

ある人おきれにこれのつるをうそ当場ハ宗祇乃あとを追
中にふれ水に伴ひいつちを宿とさしめ給ひて行脚
いつれ乃日のおのしかるし翁ゆるみ給て格さぬ人與
さしきおとりめ行脚ハ苦栗を翼とせけふハたれて
笠軽くかゝハしくれて袖をさ昂子の衣着草乃枝

ひきこのかる稱り行もこをとりてこれ於のしかれ奥乃細道
降ひきて泥にとるべく枝をかに曽良ハつるれて行なく
もあらず余ハ笠し角をこんといふ同行も又腹あしき事
あり況媒揚にねとうなおいれある是罪をのきれし
てたきけれき日もあるれとよ格をやまひ乃末つるに和月
なのはこれ今しきこそてお同由一とを出和路に分入て
負つるものに道をはられ永き日頭をそとる事なりしなにの
乃宿をのくんとするにむしかりて森にいれき雲山無いとし
雲あるに遍にまくも所なるぶと申きあひとしてむかれ乃
垣に藤乃於風つのなく嘆のるをとみて
くたひれて宿のるころや藤乃花

かくいふ句乃うのうへ家ゆへの二なくおほ通これ
られけしき拾の葉花ともいへむ

△翁古人乃句評 并いなつま乃吟

秋乃りしめ暑さいや間さまて降のぬる雲乃夏ハむら
のまゝ春見こゝとりてかゝろしけなるに稲妻のくらけ
ちる夕常のうへに浴にてゆくたなのうちしき極
乃拄にあられたまてむつましきとち古きなのうへに
いなつまやくらけてもとの入所かくへの志りられハそれ
こゝろ名句ともいへんされと愛句乃けし程をしらせ
諺話時アリ 家々に此なのめありとて
いなつまや関れのうへり 五位乃吾

△翁去来の文通乃答

又あるゆへのうへに老てもまたまたまくものの師走乃
あはれしきに遊るゝ身をことに拾打て明ぬるゆへ拾く
まれおもしろふハ山里あるを文田舎にあり一とせ此さの
里ことにて鋤鍬にうつつかさいと間なに身のとし暮て
よりまへぬのく帯のうへ志めて雪詰をなしもとり里
拾のし

山里無常お拾し 梅乃花

ちまく此句ををくるまし正事に此句意二義に解まへく
さふしふ山さとは風さしく梅乃花にまんさんの乃さくらんどち
らもお拾しとやうけそ間いらん又山さとの梅さへ通るに百年来

とのゝこぬ事よと京たつのしお詠や侍らん翁ハ此返事に
に拾ひたるとは去なくて去年乃秋三月五条あたり
を通りさふらぬにあやし乃好に青板をのけこゝぬ
たくらん乃ぬ菜ありと志るに伴ふどちおのしのりて
くるくらん乃菜なる面しとあさ笑ふまゝ某答ハまく
らんやうぞ買ふらんと申しき 翁ノ答味アリ

△翁近江行脚并路通入門

おこされ一とを学津や山をるて松陰に行やまとゝぬ
あらんをみれハいろしろきを食乃菜枕涼しけに蔬
まれやうたけやりて言麗乃菜飯乃いと古ひたる了
瓜乃皮拾ひ入やれ扇に蠅をひなのゝ一祝あり

きれゝあるもあやしくて立て尚里さしらるを給へハ目をひき
又ふさき鼾なるかもとのことしさハなるもぬれなくなれ
おして名をきゝ尚ほしく目乃さむるまて腰折のけ

夏泉に夏寐せふとの床乃山

折のゝ此時も此時や而そ琵琶乃海ちのく比良乃祢おろし
葉りたれハなるを木乃古葉こほれのるまて蟬乃声
あらりなさしに涼しと思ふほとに穴とけたりお乃こ
ぎと起あのり何爰やみ侍らん膊を打つてひとり返み
ゐたる枕由のし松風聞ふテ午睡濃とはさしたる人乃
口まさひたるを今此人をみるまとこゝろをさきをれちのく
家て志のゝ乃あゝ尚しをとふお乃こいと於のしのるまてこの

霞とみるうき無を旅乃まくなしはいつこも草の
枕なるまし翁題して曰家伊埼にはかへし時洛北
季吟のうた枕をそらさき志ぶし尚乃花にいさなはれし
今ハ俳諧のみしのきに遊んで生涯乃計とも汝に
路通の名をなつ乙汝に家所作をくるも事れし日を
着ぬ志りへに来れと来れと師弟共あはれこぬのく
志はらく蕉門乃人なるしの 路通絶交ノ事後に見ゆるり

△翁小町乃附句

尚白に物のうるをありしハうき世の果ハこれ小町なりと云
附句えしきよるを其外報向ありてむなしくおりひ又前句も
なるありしいつれや正秀の會乃席にて坂ひとつ見上て

杖におおりひと云お句あり是にこれとおりひのへさは尚
さしく小町の姿あれと句中の姿をあらはせ事のなし
推敲味あり おのゝち撰集乃思立にさまくに思ひのうるゝ意味
してとゆえられたこれしとはのりにそれ句を入るこれ其
うき世乃あるれるよる百とさ其姨に色をさ尚しる家
家の寂(さび)といひ俳中の教ともいふいふこ二三年よく学へし
と願うるはしのるしとなる

△其角堅坡に句を問ふ

炭俵撰集乃時其角の
秋乃宮屋上乃杉に大なる祇ゝ里
と乗して堅坡にむかひ此句いのんのみるやと問堅坡曰何とも

いふ事のうちに只秋乃たれたるけしき宮に一點乃雨たれし
と其角表んて巻頭に定む

△義仲寺乃法筵并其角俠客に感を抱ふ

其角義乃経を見立き初七日乃法筵義仲寺に裏
會して大津乃智月なきけある尼にて路通の不興を
ふかくのれしに義経雪ちのきころいろくと言葉を
法くしゆるせれひとことハ得られしも門人路通を踈んし
まれれ此席に畢るすあさいに寺乃まゑ所も靜かにて
智月乙州をもて連中をなくむ其角芳けあらそ
路通の泉のうんせ屋のうちされと此越時もことなり碑前
乃蜆香ハゆるせ屋しとてまけなし席にまゐされ

路通智月がうしろに思ひ志用くと庭を通るに會筵乃
徒四十余人いづれもつぶきと吐てみむのを路通憤をおさへ
のゆて大津乃俠客をのくらひ来里此席と抱さんとに
其角文臺を躍起て才徳乃袖をくさみ肉くりきに
短縁をめひて俠客に立むのふ支考丈草たもとに
まのれも洒堂正秀俠客を如きく其角を朋も
愛してひくき乳席乃とし京洲中に人となつて今ハ
天下乃堪府に家所を拵武堪に日本橋あり日本乃
人おれ橋をゐざるハなし其橋をゐるとの其角の名を
志しざるをなしやうなく大津建乃篭穴に住んて牛乃
よられに家をつなくさうやきれ書仙ざる厠に芽を出に

二葉治郎（さぞやらう）是を俳諧にはあがれといひ削りけに興
あるたいと云沙うさしきんを物みるべしといきほひ忠
喜の子れとし使客腕乃ふきとさきを家巻（いれぞめ）に
おもつて去しとも

△其角三井寺に見る二章

法延事始て正月酒堂ホのすゝに遊ふある夕大津
乃人くにいきれハれて三井寺に集る事あり 淺田乃
夕日のまのに殊つて雲津を去て集く烟乃中に厭く
と雪のうさるを隔れる花を却むのとみえて此寺に
晩蓬もなし さ時を夏乃とくうのめるまれく立て
ふのゆく雨のあとにのりを 四山茂葉して遠きを極ム

煙波何處可消愁とうちだして此月りくて山つに到
かしひたる三井の二王や冬木立 其角
たましをふ撞楼に移るて
風マのりあしくに蓬法のむ
此二章世にひゝきて芭蕉弟二世といきやきあへる所る 日
正月のうすに云ひ人くあつ居りてこれふの二章
感にたへぎ今宵乃巻に見いれまの定めん其角是を示
て嵩仲寺もあるをし家風乃吟においてそ翁も
ぬくひ目やひしき絵乃といふ事り

△支考還俗

支考ひとなる他にとれる氣億に胸に刻めることく

ユまハ一黙乃中にあるを自ら俳諧乃小技にありて
こころにまゝ雨にあるの時にはしめて薫門乃遺物や
りしめハ許古に睦ひ今ハ篠日記撰をし比ハ彦根乃
一巻相光乃とくてゝ古乃俳諧をてゞさんなと許古く
文通もありしや後才を闕つて降るされハ老師乃りゝに
衣鉢をのべし家ハ是俗して遊ぶまりと
蓮乃葉に小便をれしか金利のれ考
と因果撥無乃吟を殊ス
△支考福壽草乃花に観を
あるとしれ去福壽草を我いけて左右に愛し此花を
ゐるもしめ一輪光をもちつて後去ほめバ次の芝に

ひらさきをれ次又さかりとて支考つゝく観想して
人間乃子孫にれとく家風流もうゝれとしされハ金剛
乃色をひらくとも此花につゞ枝なんだ久しき薫和（あいぶ）とは
いふ色のうを家俳諧をつゞんもある色し文章ハ伝ふほ
さらバ東花坊乃名を削て其門人に愛躰し師
道を廣むる手段あらそれ此門人も又家にて注をあら
り解を加へ三世乃変化を畫さんと志さりに思立しとも
△支考狀亮ハ文通并乙由乃句評
支考金陵乃能亮ハ文通をうそこしそこれ山家にて
ま東西二花乃風流をこめを
芋よりも家名立ちんなれ月

ちのつきの顔こそはなる月見のれ
のくあまし言て不へいせ此乙由より又通に
やのて染る山を晒すやけふの月
とゆまりよりやうれ又つま黒毛も閑口に乃ばまことに
風雅はあやしきものなれ次第に理屈に沈淪するや
お目をやの始る吟一向なもひのけすに定て金珠乃
事こゝ有此句ひせらるゝや来てまとゝ有ト
△ちの考ハ夕鶯の第三を案
ちの考ハ夕鶯の集を撰むにいつも秋乃そしに探出
とこゝワキに第二と案し入只月とこゝ句なるのゝ聞し
やと新にあふむき夕に倚し食をたち席ワキ了

はけすかゝする事三日すして
あひすはあるめと月乃空を消て
志いとゝ此句に俳狂して玉を拾へるもの云こと又四句
め心に入らぞとこゝ事も所さすあるゝ夕に
れを一桶汲んておのうや
九句を案するゝ無深く入てあさまくともとむ下手を
無用乃工案に入て王手を車手を案するゝこと
句化して捨てとる所ありなやく取捨乃用を志らん
すは志のし
△支考童平をさしをさんてよし此山に登ル
ちの考美濃乃草菴にこもり雪になり行梢を

たるのめて初雪乃句を乗しつけよし此山乃一句を
得たる

二方書よりも軍ちにの取しよし此山

ちの考時に初も居らく此時雜まして名百乃法を
書へぞ家に一生の句なければ是を以名句とせん
にてこれ誰の舌をくるさむされと其の場にあらされ
人乃伝を記す事のたしと童平へ申しけるを
ことしの雪乃おもしろさ志まるにより乃山をおもひ
あめよ其ハお伴ひ大和路に行帰さん吾子ゆえ
やいなやといふに童平も是に同じ春もきさらぬ乃
末住のこよし此麓にさのりを待えて杖をひいて

ちもとにのろくれ松さ雪乃此とく一同千本乃
雲井をふて吉水院に参望されて南事乃昔
今さらにして古戦乃あらに涙をおくく日もそろ
ほ長く木乃宮にのれ谷乃水青むを鶯のことし
ちの考童平立ならんて石上に屁うらけされて
同者乃あらく人家を求め花乃いつこに鶯をうへと
みゆ ちの考時に頭をあげて家ゝ石乃絶唱を得
るあり聞へしやくと彼句をうらのあるを童平
眉をもつて曰いみきめを人の取よくもく其鶯のして
家をもり肺乃奴(やつご)とはなせり此吟全く孕句に早く
志らぞ来らド物をちの考 打ちて童平が胸中

をとこさあれのこともらしへのこゝろと口を掩て山をくらる

△ 支考乙由の附句を尊子

因友を伴者としてもの考寿林會を伴ひて其夜
其上点をあらはせしに

老僧乃顔を佛師にみせて置く

といふ句あり此句に市なのかんやと各さしを治し
たるに釈教乃さしあひありと執筆それ句を座し
これを一座よろこひてきをひ如ぬきてに一おとて
るとりほとに

ぬくにてとろう板はかゝみたり

といふ句いでぬ支考あきをあけて

老僧乃顔を佛師にみせてをく

とせるを妻妹いとむらいなりと以ハ見龍ノ曰支考カ別号此句
名句也是吾子がのとるる句なれハさもしくも二ちびせし
志のれど一生乃きるる句となる家欲ハ句をなしむなり

△ 惟然坊俄狂并許六天狗集と題ス

惟然坊俄狂して東西に走る句をうたふ雪にハ芭蕉
乃句を化て許ことにうれ花にハ海陽陽乃ふしに
のけて西行菴乃門にたゝきむ破れたる箕と笠に筑
紫乃雨風を清にありおて而く紀行の吟にあり

あさのと立ハふわくふわふわ
水をやむのふ乃岩にはらいつい

もいろや曽根の松風空ひきや
老山乃鼻ハひこく山春の朝
走れけるしけるし入けるし晴にけるし
あれことき吟多し持久つて老根にいたるし許六
に紀行をあらへて曰吾子此集に題を為ーや許六
けうとくおりひなのう老山乃句を巻頭をなす天狗
集と名つる也し坊られしのるして立出ぬ其のちの
事なるしけし
名と利のみちろうよろ子梅花仏
梅花あのひハあのひハあのひハ乃
此二章ハことにしたる世に吟ぬ

△惟然坊むすめにあふ并時雨乃吟
あるとき誓願ち乃ひにふして御霊に雞皮(いらくさ)をしたる女
そうなるものあゆこのるし此ほとそつきあたるしの
こゝに狂ひおいまるまとてめきまよ根乃ものとあさゝね
まれをかうひ枕をの田坊こゝろくあたる間りて日のあ
のよのまて殺つきみの屋りもきにぬけ如しの家娘乃
嫁しあけり屋様く入て其所をるしけれハ娘たもとに
まとのるしてもなさんこれほとのおこるしをしびおれ
ろしきありさ間をなげく坊を此の目をつくし
まもるし但おこせまといひて
南神に左ゝなるとなくしくれの明

△ 奈良乃桜月 かたらふの逢

奈良ん乃京に住みける桜月のゆかりにおきなされし時
いかにとくとよひてあてやかたいとらうたしとしける
なさけある人にも見えたる比は奈良の道は
ころしつの形ちなきえ桜に風雅をまなび花の
行ひをも又なりしにおもかげ新をなる名て
桜月といふ名のおこり是も又桜子の時まてとし
いまだ見くをさかんものしらし女乃あかれむへき
おぼえてなきのひろのくたるはなく行来しあるを
まのあたり帰て おのづからいつしかうつろひたるを
しもはの色まても生きてうつくしけるほどに秋に

なさけある里女

おかしな事日暮にほど書し桃乃家
と居るして恒ことに鳴やりてそのうちてあらぬさ
めさりおとこらわしくおもひなきのうみ桃の花こうへり
とのりきて女乃からを書きつけける
なさけ深く見え桃の葉乃うへとよむ
女たるしうみたるに傍にて華乃ほかなることひとき
さるを絵冊に書べてをくれ
こころのうちにおもみあさみ色を小指ともし
おとこうたのうさあひてこなさにおりゐのみちりなとも
うつりぬのくなるを行ほどにうちむつまじいでさし

たのしみたるの形 なやましともいひしの

△ 丈草去来支考野水越人石山に會す

五器なかれて石山寺の跡やよしの乃つもこり
なれハ京みな花さかりハ三井寺よけ里山の桜たる
まづさかりにて蕉翁乃さくらを面白きさらめなく
ならむもんしてともに爰ぞり去を出しむ 去来曰
俳諧ハよしなよふのの見れ風景の如きなつてハ上
乃ほうし止時なし されハ見れもしまてこれハしまて
手を拱て思案なる人にハなるのたからぬへきつきなる人
丈草曰法なる捨るもしいのた況や我法なるや
と金剛經に說きられて捨よとの教也 支考曰維
摩が家にも禰陀ほろし方に至て何ぞその捨ん捨ん
とまるよの又一物捨んとまる了一物なしと捨るとハ
金剛の体や家ハ捨るこゝろ身なる只今佛とも
よし 俳諧もよし 濟ます舟も飄念なるハこれ
さる彼乃奏ハ久しき居らしくしまれ痛痒とも
なまれ家ハ山石をそそみ出しむ者や野水越人いゑん
うおもゐる両人なくられて支考が曰風雅ハ
名ゆ乃器や家ハうき世をおもひて俳諧乃
名を狂ん

△ 杉風翁乃喪をつとむ并支考と題文

杉風ハ芭蕉乃子貢也よくはたらく数て翁乃甚ふ

音をゆとひくく家職乃道多とうり桂門を守
簾をおろし中法おこなのにはとめ長夢寺より
多句塚をいとれ其ほ支考と交をとらう
これハ芭蕉乃名を飾て風雅を練ことあさ
尚しの坊やもし東武に帰を入る与帰を
きりおらんと老を嗤て訶しとぞ

△嵐雪以下四輩を評ヌ

嵐雪ハ其ノ角にもこれを東武乃人の祖を云て
又葉風をもうしたはされいよく遊つる人ならん
史邦　正秀よくはとめる事
新屋野居集に組して幸に名を得る事

曽良も志の有事

△野坡流行

野坡ハ其ノ名を全して浪花に野坡ありといはれ
たりしの西園乃流風に化し志はらくハ流行を

△野坡皆人にあふ并多句

ある夜雪いたらぬりておりて此人をふけゆきに
衾引のつきて那らるあのつきちのうなつて障子
ひきまりあけ皆人乃入来ハ娘おとろいてそこらに
よや人くよやくと打なく野坡おきあるりこゝ
ぬれ人にむのひ家菴ハまた醸ともなしされとめし
一釜よき菓一斤ハ打得る事柴打くべあたまれて

人乃しらさると寅ほのへあけのことまたでいなれば
家まも累なるのる通しと諸法常れことゝ見きハ
盛人も折やりていて諸ほおもてゝるも見ゆるとハ貪後
金と瓦のことしさらハもてなしにあつのうんと為く
ゆんれまもなるひゆてのまくの人ゆのうるを中に
とゝ老らるめを人机の上をのきさのし句のうける
りのを折廣けらるに

家菴の急火をのかれ出て

家菴の桜もわびし烟りさ花 水波

とゝふ句を見付これ火いつれるを我や墨坡ほ曰志かく
乃此や盛人手をもて此場に此愛句させる体

くせとのハちのさ比刑をられし 火をつけ水をゆけ
愛句して遊ひのうくゝ雪乃あらはしも句にならん
新くゝ今きよん墨坡ほ曰苦楽をなくさむを
風人といふゝ雪乃事ことに於ましされとあり乃
まくに句に作らハ家ハ盛人乃中宿や只何すも
志らぬなりとかくいふ事をいてあらふ

垣くゝる雀なら我く雪乃あと

△野坡早春乃吟を志らぬ

墨坡ひとゝせ初春乃吟に

ほれしと舊くろむや宮乃去

此句世に得事ありていみきほまれたなりぬ

△李由笠塚を築り

李由ハ許六とむつひ[illegible]行脚乃[illegible]
ともなる四按戸の風流をよひ笠塚の追福
[illegible]
狂筆をし[illegible]の吟也

△許六廟を病并百子に見ユ

許六りめ芭蕉庵にくる[illegible]蕉門乃奥様を傳へ
文章ハ[illegible]を加へて支考と撰集乃[illegible]
[illegible]後病にのつて人に面をしたまく面して
風雅を[illegible]風人あれハ扉風を志さり
[illegible]金珠乃万子馬を[illegible]て許六に謁せん

事を[illegible]万子いのて屏風を隔んやとて
[illegible]
眉[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
又[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

まゝ色々ぬろに酌とらせて朱雀乃花に向ふ所にし
許古渡をおさへまことに風雅の大丈夫なりかゝる
人にはなにのおしまん亦此宿天にして餘氣いく
程もなしと長別のことはを残して入りぬ

△万子翁に随ふ田翁小枝に留る

万子ハ金珠に銀をまんて弓矢乃中に風雅をたの
しむ其此翁金珠に頭色をおろし久しく
北枝の徒に接ふ今ハ犀川をそのへりて小松の
かゝるに赴くとゆ万子むちうつて長亭を凌き漸
松任の驛にして翁の杖をまゝのりとめ俄諸君を
とめて別ゝ北枝ハ志りく伴ひゆきて送別の渡を

後とは翁もてる翁をとして留ふの吟をとるによく人の
志れる事也 翁ハ京青に萩を画ゆ 北枝死後帝因ゆゑ者

△西堂梅の證乃集をあつかる

西堂ハよく翁につゝあるとき翁梅の證といふ集を作て
みつの寄し西堂にあらへ此封をして居ることにし
ゆ人二千余輩の評をきゆめ百年後の俳諧を論ス
亦家の東事記やさるまゝこれ梅乃時を得て末世に
探乃證を合せ梅に自ひ探によれ目ひ正風の花
寝たことにれり是とあつまりて西堂の宮にひめ居り
翁の事は狂ふのくなり生涯是をひらのさるしの
西堂なくなりてのるむまめ然にのしおろし山のけ乃

菴にこもる日月ようまに堅破の門人をかりし洛乃
風くをたつる南を無る満乃大字乃のけとれ
おれほのおきれ乃真跡におくての此篇も傳人
おさむ葉門乃流此集をみさし母や

△鬼貫貪にせ備る兼路通の事

難波乃渇江に咽喝しみのきあ乃葉陰にかて
来に蓬ハたれしめとも一女乃面れひころれ亦に
今ハ鬼貫乃名をのくし新夕乃烟をいとふ芳を
花洛に遊行して翁と畫讃乃遊をしも此れ人
東西に陽をならし家ハよしあしに身をひ此め釜
中乃魚れ水を去るめこれ志ろれして出れなけ

まばとゝし夫乃のけに一通を走るめ一炭一錢交をる
とらふ此れもまつしきひのこといたんこれふハ門に車馬を
はなきけふハ雀乃巣にあらされ餌にあるふ乃きに一粒
しなく今日にせ備りし百口と男数に及ばなきあと
人をさはのせしと此一条を殊しく此なる心乃むきゑん
ひと見白鼠に木乃寒れきだもあらぎなきけあ人をひ
とつて茅にあさらひ乃水をくませ宮には掘口の根
芦を折きて薪水に乃まに此を給れのし蓬生乃
ひめとおしめ給ふなとかとめて称名を姫おとろいし
刃にきの里やよやまて家ゑれんいとけなくして母を
こそ父乃ふところに人となれ里家さし刃にあるをさし

うしきを切るはゆへにこれ園をおさめ身を守る日乃本の
宝とやいまさきのに貧にせ尚里子をたすけそふさき
父をころすものとはよしなやなきあれば父のほとし
いくほと我又双に男をさくとも父乃貧父乃然のさめる
乃最とおもるひとまつ川とけ乃なのれ志へ代をつて
孝にのるんとよしとなりて家をおしまは時にあれたる
戸をとしき所陀おしく杖をひらて久しく西をさ侍
路通来る親子あるて西をのへ双を家におさめれのう
むきめさるへにまきれ入ぬ鬼貫それ事をはらむ
に志れびを志るし乃事をのられハ路通も雨乃とく
涙落て人乃行来乃をのれきを歎し鼻折のきて

いありけるをそ那きへのうきを賣るのうきを父をしてくひ子を
まくふ家にひとつれ術ありと鬼貫の耳に口を合せ
此隠事案又ヘシ其れとも鬼貫を奉をはてにきしくハ世をされとも
志れるものハうきをうらひ路通ハ似せ筆乃上くすと
いたれて社中乃憤をうけしなり

△涼兎変化に遇

涼兎ハ其性お目とのまして低諧を宿子を見ハせに
園女奇乃名ある事ハおく人の志る所に中園に遊び
北部にさましふ秋乃比なるんおもゆ立て人法くしれ山路う
まけ入雨一通りるて日ハまくに筆を備しとおもゆ宿りれ
そのうちそのうち里雨これ行来しまそ里をやきのんぬき

谷水をいる事小笹原志めやのに合羽の上をけるにして
ゆくあとをふりのへれを大地をたゞる二尺をのり
長さ丈余とみゆるものく赤きいろ炎乃とく風をおこし
さのさ海に立てうつくとなく死ともなく中にたれきて
ちのつき来る涼兎たまゆきて肌膚乃とく襟室
うまりて呼んとするにあらをしぶ事あしにまをのけて
一歩つて前にまくむのくしてうしろに青あつて水さつと
なり木のやうこさ物ひしくと吟ゆぬりのへれを
其此物をこぼこうちまこしたる身にもとるまで汗を志ほ
里人喪に入たあるし涼兎がおもてをうさふ涼兎志ゝ
くれ変化をのるあるしまうひて世まつぶだけ物

まあらせ此山乃蛇蚓也涼兎狩をうくあはし
のるをけるまで蛇蚓山乃出をくらつてとしかれを
土氣を起し室に乳のれらせマけふ乃とく雨
たれしタつくさいくつともなく出ありき澤蟹
をすつぬし其此蟹乃脇を吸西園に多き事
なるこれこゝぞ其なるのにも沢蟹ハおれる
るしあいのんとなれハ蟹の大さ三尺四尺大にして丈
餘にいたる背にはさむし本草を生し目乃之
天を射るをさみをあげ足をのへて人をくらぬと
まくなし蛇蚓ハのれをすゆふして却て人をハ
まくふなりとあやしきものなるに入つると也

△涼兎数世

涼兎病の来つるといひをく事あれば門人扶は立よりさいのり此園友東辞世乃句をのこしマグイ
のいてのとなけませて涼兎目をひらき言ふに

のつてんしマ其暁乃ほとゝきは

かくはしたるのゝあのつき此花の杜宇とやせんとゝふは乙由のさいしにありて変に何なるの脇回せんを暁の
ほとゝきほと折あけてとまへられは曽小栄をとりて
来るしぬ

△青妹椿乃花に對し月花の御情を悟

此青妹ハ川崎にむまれ寝ゝこゝ職めてさけ祈と

宝をあつめ利をみる事をしらせおさおさより青栄
清水に寄る意を傳人風雅ハ笆葉乃門に落つかしし
たしめ者さひしこゝ此冒をのんのこゝ風雅ハ安を為
にありと情より来し入るるの青乃比わらせんの
夜ちる椿乃花を拾ひ糸につなき越ふをこゝて
俗諧乃姿をさとす一句乃変化をしまるより天下
に名人の号ハ得られ此諧話に落ちる
椿多くき中より白きハ拾て安きを拾ふ乙由門だへ
に多くふれて左とやもある花をもしさば白きとて
拾遺のうち安きとてこれむへのうち安きも白きと
折あはせて承旨をさとのけしめそれはしきるあんと

何とはなくなしかの風流ものゝ先とく柳樹を
交へてこれを春の柳とはよめるやさらハ月花を情
まあらはしまゝにうきたるものなるハと宮女の女の句
乃あつかひを轉ぜ（ユ文味アリ）

△ 古の考 妻林と才をたゝかふ

古の考 妻林乃留言に本里に席乃柱にそはれけるハ
見就 みな句 妻林に及ハ妻林 附句 見就に及
ハ其と大筆に走るして去りぬ其れなり見就の
事なるを待て妻林乃曰 女の句 此坊に勝るを
あらはしめていふ色かゝを附句 相まされ里とも見就
やまかゝを思ひてさらハ席にあの句を出して

附句をゆん妻林いと屈きしと答ふ見就 時に難をん
と硃乃ことくいひかけるに此中に
まつ黒に白紅（シロクチナイ）にぐれしと 見就
車の牛の雪に夕 だんへ 乙由
いま一句 不自といふに
雪やうに雲 源平乃籠 乙由
又一句 ゆんといふに
頭巾で走れふ 能珠の裾 乙由
見就 古を雲なるあり
やれしと左をけさふあり 情（コハ）ふあり 見就
たしなさのうつて山家につまさん 乙由

又

稱珠乃これて乾ンぐとよしくのり 兄乾
門のうら迎る 鰯乃 億 病 乙由

いつれも前句乃息をつきあへぬぞ兄乾口をとちて
見乾の前句書林に及ばれて見乾附句書林にあるよ
ひとてとゆきを加へて 降しと我

洛東にも偏安里口鉢開くし 風雅を
説まゆゝ事又洛東にあれ書 記はし
風雅無世云太子ゝ称 我もむしろ名此
ゆゝ我此ゆゝ我あるのいはゝ
おもむ出れまに九月十よる野也此
ゆゝ我を示ゝ何りかゝしかのも偏
ゆゝ道を聞ふし 時ぬかさ山我を
事出を語偏禍を出しかき八武我

帋ハ述せられたるの也一書ハ文章擲に
全ハ書ハ書ハ二条にしられ出肆寛
次ふるとの事ハ跋せられ責我ハ以ちくら
ハ画と賣事せられ条ことを疎ハ
いと同あらせ云ハ意を集箋に托する人
數ハ同志ハ説へし帋ハ重
めハ跋せられハ甘しきも云ハ同の如見かな
句章ハ志を用ハ染画の筆意和漢三

千ハ軍紀論して雖して押付に得
序ハ如しとハふしぬ

辛未九月

活志活橋

京都寺町二條上ル

井筒屋庄兵衛板